

自殺援助法（抜粋）

第一条① 日本国籍を有し且つ七十歳以上の者は、本人及びその家族が申請する場合に限り、自らの命を絶つことができる。以下では、その者を自殺対象者と呼ぶ。

② 第一条第一項の家族が申請する場合とは、本人の意思能力がないと見なされる場合に限る。

第二条① 自殺対象者には、申請日の次の日から七日間の猶予が与えられ、その間に命を絶たねばならない。

② 猶予期間中には、対象者以外の身に危害を加える場合を除き、自殺対象者の権利が第一に優先される。

第三条① 自殺対象者には、日本政府から自殺執行人が派遣される。

② 自殺執行人の任務は次の各号に掲げるものである。

一 自殺対象者が対象者以外の身に危害を加えることのないように監視をする。

二 万一、自殺対象者が対象者以外の身に危害を加えた場合は、日本政府により携帯が認められている銃で即座に射殺する。

三 猶予期間中の自殺対象者の権利が、対象者以外の身に危害を加える場合を除き、第一に優先されるように支援をする。

四 自殺対象者が猶予期間中に死を望む場合は、自殺執行人が対象者に薬剤を投与する。

五 自殺対象者が猶予期間中に命を絶たなかった場合、第三条第二項第二号と同様に射殺する。

○第一部

二〇六〇年、自殺援助法が衆議院で賛成多数で可決された。与党議員と野党議員が体を張り、怒号が飛び交う混乱状態の中、議長の採決は下された。国会議事堂前には、法案可決に反対する学者や弁護士、聖職者、国民が集まり、警察が出動する事態にまで陥った。地べたに横になり退かされる者、警察に殴りかかる者、この場を静めることができる者は誰一人としていなかった。

その中で、一人颯爽（さつそう）と国会議事堂から出て行く者をテレビは映し出していた。歴代最年少の内閣総理大臣である安藤肇（はじめ）であった。

安藤は、三〇代半ばから頭角を現し四〇歳にして国会の頂点にまで上り詰めた凄腕の政治家である。老練の政治家とも対等に渡り合い、国民からの支持も厚い。

しかし、日本の景気はバブル崩壊後から良くない。経済成長も今や望めなくなり、先進国の座からは滑り落ちようとしている。

暗雲が立ち込めるような未来しか見えない日本社会で特に問題になっているのが、高齢化である。今や高齢化率は四十%にまで達し、高齢者一人を現役世代一、三人で支える時代である。年金の受給開始年齢も七十歳まで引き上げられたものの、如何(いかに)せん財政が苦しい。年金も満足にもらえず生活に困窮する高齢者が急激に増加している。さらに、追い討ちをかけるように、介護問題も浮上してきている。医療の進歩で男女ともに平均寿命は九十歳を超えたが、健康寿命は七十歳で延び悩んでいる。また、認知症の根治に至る治療法は未だ見つかっていない。介護施設は常に満床状態であり、介護の負担は家族に重くのしかかっている。

こうした日本社会の窮状を救うべく、新内閣総理大臣に任命されたのが安藤肇である。安藤への国民の期待は厚く、どのような手段を講じるのか注視され、その一手が自殺援助法案の提出だった。法案提出がなされた際には、各メディアが一斉に報じ、その勢いは国民全体を巻き込んだ。反対派が優勢な中、安藤は記者会見を行った。

「現在、わが国では安楽死に関する法律はありません。判例レベルでは、安楽死に関する四規定があります。①患者が耐え難い肉体的苦痛に苦しんでいること、②患者にとって死を避けることは不可能であり、しかも死期が迫っていること、③患者の肉体的苦痛を除去・緩和するために方法を尽くし他に代替手段がないこと、④生命の短縮を承諾する旨の患者の明示の意思表示があること、です。ですが、実際には安楽死の事例はほとんど存在していません」

安藤はここで、彼を取り巻く報道陣の顔を一様に見た。そして、国民に語りかけるように再び話を始めた。

「皆さん、日本社会について考えてみてください。日本は世界屈指の長寿国です。国際的にも長寿の秘訣に関心が集まっています。ですが、長く生きることが果たして幸せなのでしょうか。考えてみてください。今の四規定では、自らの人生の幕を閉じる時期の選択ができません。何故ならば、死を迎えるには、耐え難い肉体的苦痛や死期が迫っていることが条件となるからです。私は、国民の皆さんに生きる権利のみならず死ぬ権利も保障するために、自殺援助法案を国会に提出したのです」

その後、安藤は法案の細かい点について話し続けた。国民の自殺援助法案に対する風向きが変わった瞬間だった。

結果、野党や国民の一部からの根強い批判はあったものの、自殺援助法案は可決された。

○第二部

森岡憲司は、頬杖をつきテレビを見ていた。見ていたというよりも、眺めていたという方が近いのかもしれない。朝のワイドショーの司会者の声が、唯一、部屋の中で響いていた。家の中は少し冷えていたが、暖房をつけるために動くのも億劫(おつくう)で、そのままだった。今、流れている特集は、出版業界の新たなビジネスについてらしい。どうやら、命を絶つことを決意した自殺対象者が猶予期間中の七日間を手記に纏(まと)めたものが売れているようだ。かの有名な芸能人も命を絶ち、その手記が非常に注目を浴び話題になったそうだ。有名人だけではなく一般人の手記も同様に売れているらしい。

今の時代、何でもビジネスになるのだなと森岡はふと思った。そのまま考えごとをしているうちに、次の特集に切り替わっていた。

森岡は一時間程するとテレビを切り、日課の散歩に行くことにし、長年使っているねずみ色のジャンパーを着て外へ出た。

森岡が住んでいる地区は、高齢者が多い。かつて山だったところを切り崩しベッドタウンとして売り出していたもので、その一つを森岡は妻の京子と相談して購入したのだった。購入の決め手は、子どもができた時に部屋数が多い方がいいだろうと考えたからだった。

家を購入してから十年、二十年の間、この地区は賑わっていた。だが、それ以後はこの地区で生まれ育った子どもも出て行き、残されたのは高齢者のみであった。

森岡と京子の間には結局子どもは生まれず、この広い家で二人はこの地区に住み続けた。その京子も、森岡が七十歳で定年退職した一年後に、がんでこの世を去った。そして、四年が経った今も森岡はこの家から離れていない。

歩いていても、誰の姿も見かけなかった。特に行き先を決めているわけでもなかったもので、思うままに歩き続けた。

住人がいなくなって数年は経つであろう家が目につく。雑草が庭の至る所に茂り、中には森岡の肩ぐらいまでのものもあった。地震が起きたら今にも倒壊するのではないかと心配になる家も目立った。この地区は社会から置き去りにされているようだ、と森岡は考える。

四十分ほど歩くと足が重たくなってきたので、森岡は家に帰った。そろそろ時計の針が十二時を指そうとしていたので、台所に立つ。

森岡は、大企業ではなかったがそこそこの会社に勤め続け、定年退職後も京子が家事をこなしてしてくれた。京子の料理は手が込んでいて、会社の同僚を家の夕食に招待した時も、評判が良かった。だが、京子が病気になるようになった後は、森岡が家事全てをしなくてはならない。最初は、料理も一切できず焦がしてばかりだった。そのたびに京子のことを思い出し、一人涙に暮れていた。

今では、料理もぎこちない手付きではあるもののこなすことができるようになった。今回は、焼きそばを手早く作った。

生姜をたくさん入れ、口に焼きそばを運ぶ。生姜の味が口の中に広がった。ほどほどに上手くできたなと森岡は振り返った。

食卓を一人で囲むのは寂しい。自分の咀嚼(そしやく)音のみがこの家に存在する音であるのは気が滅入る。森岡はテレビのリモコンを手に取り、電源ボタンを押した。

再び画面が明るくなり、先程のワイドショー番組の次の番組が流れ出した。お笑い番組の再放送だった。何やら、二人で漫才をやっているらしい。これなら、番組に熱中できるし、家に賑わいをもたらしてくれると思い、つけっぱなしにした。だが、いざ見みるとあまり面白くなく、時折テレビから漏れる笑い声のみが虚しく家の中を包んだ。

これは見てられないと森岡は顔をしかめ、公共放送に局を変えた。すると、政府が自殺援助法に関する新しい取り組みを明日から始めると、テレビのテロップが流れた。箸を動かすのを止めて、テレビを見つめた。ニュースキャスターが読み上げるのを待つ。

「明日より、政府は自殺リズムを始めます。自殺リズムとは、自殺対象者が集まり、対象者各々が事前に希望を出していた場所に到着すると、自殺執行人により薬を投与され死を迎える旅行のことで」

いつの間にか、箸は手からすべり床に落ちていた。森岡はテレビに食い入るかのように、画面を凝視した。

「手続きは、お住まいの市区町村にて可能です」

キャスターはそれ以上の内容を読み上げることなく、次のニュースに移行した。

森岡は、その自殺リズムが気になって仕方がなかった。自殺援助法案が可決された時は、特に何も感じなかったはずであった。だが、「あの場所に行き、死にたい」という強い思いが、突如沸き起こってきた。

<一日目>

昨日、私は昼の報道を見た直後、市役所に向かった。自殺援助課に行き、自殺リズムの申し込みをし、希望の死に場所を伝えた。手続きにはもっと時間を要するかと思っていたが、意外にも早く一時間程度で済んだ。対応してくれた中年女性の態度も事務的で、こちらを気遣わずとても気楽であった。

自殺リズムは明日から六日間である。気は急ぐが、今日は旅行の準備と遺品整理をしている。市役所に申請しに行った時に、「旅行に必要な物は何があるか」と尋ねはしたものの、「普通の旅行と同じような持ち物でいい」と言われてしまった。何を持って行こうか迷ってしまうが、京子の写真だけは持って行こうと思う。それ以外は、全て処分してしまうしかなさそうだ。処分は国が委託した業者が行ってくれる。一つ一つの品に京子との思い出が詰まっているが、これでお別れだ。この家も私が死んだ後は取り壊されるのだろう。

申し込みをした本人が言うのもおかしいかもしれないが、六日後には自分が死んでいるという実感が湧かない。そういうものだろうか。誰かに聞いてみたいが、聞ける人もいないので止めておく。

明日が待ち遠しい。

明日の準備も遺品整理も終わったので寝ることにした。

<二日目>

昨夜は目が冴えてしまい、よく眠れなかった。今回の自殺リズムはバスで移動するようだ。市役所の申請の際に、あの女性が教えてくれた。

荷物を持ち朝早く家の前で待っていると、バスがやってきた。一度だけ振り返り長年住んでいた家を目に焼き付けた。

すぐにバスから喪服に身を包んだ男性が出てきた。「荷物をお持ちします」と彼は言い、衣服などが入っている鞆を私から受け取り、バスのトランクへしまった。その間に私は、それ以外の荷物を持って車内に入った。すると、すでに二人の乗客がいた。

「おはようございます」と軽く挨拶をすると、二人も私を見て返してきた。一人は、私と同年代の浅黒い肌をした男性。もう一人は、私より年上に見えるが、背筋が真っ直ぐに伸びており意志の強さを感じさせるような女性であった。

座席は長テーブルをはさむ形で十席ほどあり、どこに座ればいいのか迷ったが、先に乗っていた男性と女性は向かい合って座っていたので、男性の一つ隣に腰を下ろした。

先程の喪服に身を包んだ男性が車内に戻ってきた。そして、私たちの方に向かうと、

「初めまして、皆様。私は、自殺執行人の田中と申します。本日から六日間、自殺対象者である皆様の旅をお手伝いさせていただきます。よろしくお願い致します」

と挨拶をした。その声からはどのような感情も読み取ることができず、私は田中をよく見た。

中肉中背で、恐らく三十代の半ばぐらい。顔つきは別段、特徴があるというわけではなかった。

田中は一度話を止め、私たちに紙を配った。その紙には、今日から六日間の予定が書かれていた。参加者の名前も書いてあり、どうやら一つ隣の男性は佐藤良一、向かい側の女性は久保田恵美という名前のようなようだった。

「皆様が事前に申請された希望地をもとに、今後の予定を組ませて頂きました。ですので、佐藤様、久保田様、森岡様の順番で希望地へ参ります」

と、田中は告げた。私は二人が気になったので、田中の方に向けていた顔を彼らへ向けた。

佐藤は落ち着かない様子で、しきりに貧乏ゆすりをしていた。順番だと彼が最初なので、やはり気持ちが高ぶるのだろう。一方、久保田は対照的な様子で表情も変えず話を平然と聞いているようだった。

私は久保田と同様、動揺することもなく冷静さを保っていた。自分が死ぬということに未だ実感を得られていないが、命を絶つということに何のためらいもなかった。

その後、話が再開されなかったため、これで説明は終わりかと思い、私は佐藤と久保田に話しかけようとした。だが、田中の話は終わりではなかった。

「希望地に到着するまで、自由にそれぞれお過ごしになられて構いません。ですが、これだけは皆様に守って頂きたいのです。ご自身の希望地に向かう時になるまで、自らの命を絶つきっかけというものは話さないでください。これは、自殺対象者同士による感情の衝突のトラブルを防ぐためのものです。日本政府が自殺ツーリズムを始める際に規定しました」

と、二人に話しかけようとした私を見て、相変わらず抑揚のない声で言った。

この説明で、私は何と二人に話しかければいいのか迷ってしまった。田中は今度こそ話を終えたようで運転席の方に戻って行った。佐藤と久保田と私は、次にどのような行動を取ろうか逡巡(しゆんじゆん)し、居心地の悪い雰囲気のまま取り残された。

バスが動き出し、これまで私が住んでいた場所が遠のいて行く。社会から置き去りにされた場所から逃れることができた気がした。

依然として車内には気まずい雰囲気が漂っていたが、寝不足の体を休ませるために目を瞑(つぶ)った。すぐに睡魔が襲ってくる。私はそのまま眠気に身をゆだねようとした時、

「話を聞いてくれないか」

と、佐藤が意を決したように声を発した。私は再び目を開き、佐藤の方に顔を向けた。

「どういった話です？」

と久保田が静かな声で尋ねた。

「俺がこの旅行に参加したきっかけだ」

佐藤は相変わらず貧乏ゆすりをしたまま言う。

「俺の行き先が一番だ。だから、その話をしても問題ないだろう」

とバスを運転している田中にも聞こえるように少し大きな声で尋ねた。

「もちろんです」

田中が返事を返した。「俺はもともと、誰かに俺の話を聞いてもらいたくてこの自殺ツーリズムに参加したんだ」と前置きをして、佐藤は堰(せき)を切ったように話し始めた。

佐藤は、七十年前に山沿いの小さな村に生まれた。隣の町に行くのも、車で一時間かかるという辺鄙(へんび)なところである。村は主に農業で生計を立てており、当時からこの村は高齢化が進んでいた。

両親も農業を営んでおり、朝早くから働いていた。佐藤自身も小さな頃から両親の手伝いに借り出されたが、どれほど両親が汗水流して働いても、家は豊かにならなかった。いつも父親と母親がそのことで言い争いをしていった。

小学校から高校まで隣町にある学校に通ったが同じ村から通う子どもは佐藤の他に数人しかおらず、町に住む子どもとの間には見えない壁があった。制服や体操着はいつも誰かのおさがりで、クラスメイトに陰で馬鹿にされていた。

また、小さな村のため互いのことが筒抜けであった。他人に知られたくないことでも秘密にしておくのは難しく、翌日には皆に知れ渡っていた。家の外で女たちがよく集まり、おしゃべりに花を咲かせていた。その声は佐藤にとって非常に不愉快なものであった。

彼は、この村が嫌いで堪(たま)らなかった。早くどのような形でも出て行きたくて仕方がなかった。高校生になる頃には、都会に出て行くことを決めていた。

高校三年生になった時、両親に高校卒業後は都会の大学に行くと言った。父親と母親は家の貧しさを理由に反対し、佐藤に農家を継ぐよう強く言った。彼は諦めず説得を続けたが互いに頑として折れず、仕舞にはひどい言い争いになった。そして、佐藤は両親を説得することは止め、「自分で働いた金で大学に通う」と宣言した。

それからの佐藤は、隣町でバイトを見つけ必死にお金を貯めた。バイトを始めた頃は、両親もどうせすぐに諦めるだろうと高をくくっていた。だが、佐藤はお金を貯め続けた。無論、奨学金も借りることにした。

一年が経ち、佐藤は晴れて大学に進学することになった。引越しの日、両親とほとんど話さず出て行った。未練は何も感じなかった。

大学生活はとても充実したもので、今まで人里離れた場所で暮らしていた佐藤にとって、都会は目を見張るばかりだった。学費と生活費は自分で賄(まかな)わなくてはならないため、バイトで忙しい日々だったが、それでも楽しかった。

だが楽しい日々は続かなかった。その頃の日本は深刻な不況であったため、佐藤は就職先を上手く見つけることができなかった。

派遣先を転々とする生活を続けた。両親から時折電話がかかってきたが全て無視した。留守電には、家に帰って来いという内容が吹き込まれている場合もあった。

家に帰ろうかという考えが何度も頭の中をよぎった。奨学金の返済もしなくてはならなかったので、生活はとても貧しかった。

帰るわけにはいかない。佐藤は、そのたびに自分に言い聞かせた。家に帰ることは両親に屈服することと等しかった。自尊心が邪魔をした。

そうした辛酸を舐めるような生活を続けていた時、同じ派遣先の岡部理沙子と出会った。理沙子はよく笑う人で、その笑い方がとても魅力的だった。これまでにない程に緊張しながら交際を申し込むと、理沙子は「お願いします」と喜ばしげに言った。

以後は徐々に距離を縮めていった。それと比例するかのように、理沙子との将来を考えると不安が大きくなっていった。もし結婚したら生活はやっていけるのだろうか。子どもが生まれたらどうすればいいのだろうか。

考え込むことが多くなり、理沙子に心配されるようになってしまった。

考えあぐねた結果、佐藤は理沙子との結婚を選んだ。理沙子に結婚を申し込んだ時、彼女の至極の笑顔が見られるかと思った。

結果は至極の笑顔どころか笑顔も見られなかった。理沙子は悲しげな表情をしてこう言った——ごめんなさい。あなたとは結婚できません——佐藤は自分の耳を疑い理由を聞いた。佐藤自身を納得させられる理由を。だが、彼女は首を振るばかりで何も言わなかった。

彼は、彼女が言わずとも理由が分かったような気がした。仕事が不安定だから。彼女との間に生まれるかもしれない子どもを支えていくには、佐藤では不十分であったから。

これから先のことは記憶から抜け落ちてしまっている。彼女に佐藤がどのような言葉を投げかけたのかは分からない。

岡部理沙子は佐藤のもとから去って行った。まもなく、佐藤は派遣先が変わった。

以後、佐藤の生活は前にも増して荒んでいった。前はあまり飲まなかった酒も、飲むようになっていた。派遣先でのミスも多くなり、遂に派遣会社からも首を切られた。

そうした時に、父が亡くなったと母親から連絡がきた。高校卒業後は一度も会っていない父親。家に戻ろうか心が揺れたが、戻ることはできなかった。今の自分の姿を亡くなった父親や母親に見せる気にはなれなかった。

佐藤はその後、日雇い労働者が集まる町に足を踏み入れることになる。日々生きるために、もらえる仕事は何だって請け負った。その金で酒を買って飲むことが唯一の楽しみだった。母親も亡くなったと風の便りで聞いた。

そのような生活を続けていた時に自殺援助法が施行された。佐藤は最早生きることにうんざりしていた。日雇いの仕事も回ってることが減り、食べる物にも事欠くようになっていた。体も今は動いているが、体の節々は痛みいつ使い物にならなくなるのか分からない。佐藤にとって生き続けることは何の意味も持たなかった。

自殺援助法が施行されたと聞いた時、佐藤は深い安堵を覚えた。これで全てを終わらせられると思った。

だが残念なことに、その時点で佐藤は七十に達していなかった。数ヵ月後に七十回目の誕生日を迎えるのであった。

一日でも早く命を絶ちたかったので、一人で首を吊って死ぬことも考えた。佐藤は迷い、思い悩んだ。

思い悩んだ末、七十回目の誕生日を待つことに決めた。自殺援助法に則れば、少なくとも自殺執行人には見守られて死ぬことができる。生きることに嫌気が差していても、誰にも知られることなく死ぬことは恐ろしかった。誰かの記憶に、佐藤良一という人物がいたことを留めたかった。

そして、七十歳の誕生日を佐藤は迎えた。申請をしに出かけようとした丁度その時、外の電光掲示板に自殺ツリーゾムのテロップが流れ、佐藤は足を止めた。

死で繋がる旅は佐藤にとって好ましく思えた。これにより多くの人に、佐藤良一という人物が確かに存在したことを刻めるからだ。

希望地はどうか躊躇(ためら)った。特に希望なんてものはなかった。思い入れのある場所もなかったからだ。

市役所で対応してくれた女性にそのことを伝えると困った顔をされた。少し考え込むような素振りを見せた後に、
「佐藤さんのご実家はいかがでしょう」

と提案をしてきた。父親と母親が亡くなった時にも帰らなかった家。主を失った家。他に行く当てもない佐藤にとっては、お似合いの場所のように思えた。だが、その家が現在どうなっているのか全く知らなかった。

そのことも女性に伝えると確認を取ってくれた。十分程待たされた後に、まだその家が残っていることを教えてくれた。そして、長年誰も住んでいないので取り壊される予定であったことも伝えてくれた。

大学に合格し引っ越した時から時間が止まっている、自分の家を思い出す。懐かしいような寂しいような不思議な気持ちになった。

佐藤は、希望地を生まれ育った山沿いの小さな村にした。

「以上で俺の話は終わりだ。つまらない話を聞かせちゃって悪かったな」

と顔を掻きながら佐藤は少し恥ずかしげに言った。そんなことはないと思はれた。同じようなことを久保田も思ったように、

「そんなことありませんよ。佐藤さんの人生、聞いていてとても惹きこまれました。私も……、もう死んでしまいましたが、佐藤さんのことをしっかりと記憶に刻みました」

と、少し目を潤(うる)ませながら言った。私も頷きながら、

「話を聞かせて頂いてありがとうございました」

とお礼を言った。

気付けば時間もだいぶ経ち、昼過ぎになっていた。お腹も空いていた。

「田中さん、話をしていたらお腹も空いてしまった。何か、食べる物はあるかい？」

と佐藤が尋ねた。

「運転席の後ろの棚に、お弁当を用意してあります。ぜひ召し上がってください」

と田中は運転しながら言った。私が一番、運転席から近かったので立ち上がって三人分のお弁当を取りに行く。指定された棚を開けると確かにあった。

三人でお弁当を食べ始めた。日本政府が用意してくれる昼ごはんとはどういうものか興味があったが、至って普通である。二人も同じことを思ったようで首を傾げていた。

「政府が用意してくれるので、少しは期待をしていたのですが……」

と私はつい本音を漏らしてしまった。それを聞いて二人も笑った。先程とは打って変わって和やかな雰囲気になった。「申し訳ございません。政府は財政が苦しいもので」

と、田中が特に申し訳ないと思っている風でもなく謝ったので余計に可笑しく、三人でしきりに笑った。

以後は互いに打ち解けるようになり、思いついたことを話した。

そうして時間はさらに過ぎていき、田中の「皆様、到着致しました」という声がかかるまで、ずっと話していた。

バスから荷物を持って降りると外は夕方になっていた。周囲には一面、田畑が広がっていた。今の時代には珍しく街灯が一つも見当たらなかった。遠くの方に家の明かりが灯っているのが分かった。佐藤は、特に何も言わず、故郷の地を踏んでいた。

「申し訳ございませんが、ここからはバスが入ることはできませんので、徒歩でお願いします」

と田中が言った。

「佐藤様のご実家まで十分程で行けます」

そして佐藤の方を見て、

「久保田様と森岡様はいかが致しましょうか。ご実家までお連れになりますか。それとも、宿までご案内差し上げた方が良いでしょうか」

と聞く。佐藤は久保田と私を見て、

「私の家まで来てくれないか。二人にもぜひ見てもらいたいな」

と頼むように言った。久保田と私は佐藤について行くことにした。

佐藤と田中を先頭に私たちは家へ向かった。遠くでカラスが鳴いているのが聞こえた。誰一人として口を開く者はなく、鳴き声がひどく大きく響いた。

家に着いた。小さな木造建ての家で所々腐っている部分もあり、長年の間、主が不在であったことを思い出させた。田中は、この家で間違いはないかと佐藤に確認すると、「そうだ」

と妙に掠(かす)れた低い声で返した。田中から鍵を受け取り、佐藤だけがまず家の中に入る。私たちは外で待っていた。しばらくすると、

うおおお、と咆哮のような泣き声が聞こえてきた。久保田と私は顔を見合わせた。二人で家の中に入ろうとすると、田中が押し留めた。

「入ってはなりません。今、佐藤様はご自身の人生と向き合っておられるのです」

久保田と私は、佐藤が出てくるまで待った。あまりに長いため、田中が止めたとしても押し切って入ろうかと考えた時、佐藤が家の中から出てきた。

久保田と私はかける言葉もなく、ただ佐藤を見つめていた。

「家の中に入ってくれ」

と佐藤が言った。中を見てもらいたいからだと言う。

久保田と私、最後に田中が佐藤の後をついて行った。家の中は長年閉め切られていたためか、埃(ほこり)っぽかった。けほけほと咳をしながら中を見回す。時計も止まっていて、現在時刻とは違うところを針が指していた。

「ここで俺は高校生の時、父親と母親を説得していたんだ」

と、畳の上の卓袱台(ちやぶだい)を指差した。

「父親と母親だって、そんなに仲が良くなかったのに、俺が大学に行くと言った時だけ、揃って止めろと言った」

と言い、俺はもちろん反発したさと佐藤は続けた。

「だけど、俺のこんな人生だと、農家を継いでいた方が正しい選択だったのかもしれないな」

と弱弱しい声で呟く。

「一度も顔を見せないうちに、父親と母親は亡くなっちゃったしな」

私はただ黙って見ている他なかった。だが、久保田は

「いいえ、佐藤さんの選択は正しかったのよ。たとえどのような結果を迎えようとも、その時に必死に悩んで得た答えであったなら全て正しいわ」

と迷いなく言い切った。

その言葉の勢いに私は啞然とした。佐藤も毒気を抜かれたような顔をしていたが、最後にぽつりと言った。

「そうだな。あの時、俺が出した答えは間違っちゃなかったのかもしれない」

今まで黙っていた田中が口を開いた。

「そろそろ、久保田様と森岡様を宿泊先までお送りしましょう。佐藤様は、ここに泊まっていられますよね」

「ああ、そうだな。家財や布団も残されたままだしな」

「では、後でお夕食をこちらまで運びますね」

「久保田さん、森岡さん、ここまで付き合ってくれてありがとうな」

佐藤は心なしに憑き物が落ちたかのような穏やかな顔をしていた。

久保田と私は、佐藤の家から五分ほどのところにある民宿へ案内された。どうやら、この村では数十年前から農村観光というものをはじめたらしい。都会から農業体験をしに観光客が来るそうだ。その観光客を農家の家が泊めているらしい。

居間に通され、田中と久保田と私は一緒に夕食を食べた。久保田と私は、それぞれ佐藤のことで物思いにふけり、会話は捗(はかど)らなかつた。田中は、佐藤に夕食を運んで様子を見に行った後、黙々と食べていた。

「佐藤さん、今、どのようなお気持ちなんでしょうね」

沈んだ表情の久保田が言う。

「でも久保田さんのあの言葉は、佐藤さんにきっと届いたように思いますな。私も聞いていて救われたような気持ちになりました」

と返した。私も過去の選択が正しかったのか、もしも違った道を選んでいたら未来は変わっていたのではないかと悔やんでいることがある。その悔やみが久保田の言葉を聞いたことで、少し和らいだ気がした。

「佐藤さんは、明日の朝、命を絶たれるのですよね」

と久保田は田中に聞いた。

「そうです。佐藤様は明日の朝、人生を終えられます」

「私たちはどうすればいいのでしょうか」

「佐藤様のご希望次第なので、明日伺ってみます」

と田中は答えた。

そうした会話をしているうちに、夕食の時間は終わった。

その後は明日の予定を軽く田中から聞き、各自が部屋に戻って行った。

まだ寝るには早い時間だったので、私は外を散歩することにした。日が落ちると急激に冷え込んだので、厚着をして出かけた。

外は暗闇に包まれていた。だが空では無数の星が光り輝いていた。佐藤も今、少年時代に慣れ親しんだこの星空を眺めているのだろうかと思うと何故だか切ない気持ちになった。

顔に触れる空気は冷たかったが、目まぐるしい一日で心が波立っていた私に落ち着きをもたらしてくれた。

三十分ほど歩いた後、宿に戻った。昨日の寝不足もあってか体も重く感じられ床に就いた。

〈三日目〉

目を覚ますと朝になっていた。服を着替え居間に行くと、田中と久保田の二人は先に朝食を食べ始めていた。私も席に着き、器に手を伸ばした。それが合図かのように、田中が久保田と私に向かって話し始めた。

「佐藤様に先程お話を伺ったところ、久保田様と森岡様がお嫌でなければ、ぜひ、立ち会って欲しいとのことでした。お二人はいかがなさいますか」

私は、佐藤の頼みならばという思いと同時に死の様子を実際に見てみたかった。そのため、行くという返事をした。久保田も、どのような思いで言ったのかは分からないが、行くと答えた。田中からの話は以上だった。

私は、佐藤の様子が気になり少しでも早く彼の家へ行きたかったので、朝食をとることにしばらく専念した。ただ、いくら箸を口に運んでも味が分からない。

やっと私も緊張しているのだと気が付いた。バスに乗り合わせた時から、田中以外の人は死ぬのだと分かっていたはずなのだが。それでも、現に食事の味が分からなくなって、頭の中が混乱した。

人の死に直面することが怖いのかと自問する。私は否という返事をすぐさま返すことができると思っていた。自分の命を絶つことを決意した者が、死に恐怖するわけがない。ましてや、同じ決意をした者の死に立ち会うだけで。

だが、私は否と返すことができなかった。昨日、初めて知り合った佐藤がもうすぐ死ぬ。一緒に話をし、ご飯も食べ、そして感情を曝(さら)け出して泣いていた彼が、後少しで動かなくなる。

それは私に底知れない恐怖をもたらした。

だが、昨日の佐藤の話を思い出すと、死というものは安らぎをもたらしてくれるようなものに思えた。生きているだけで幸せとは口が裂けても言えない。生きることよりも死を選ぶ方が、まだ良いという場合が確かに存在するのだ。

いつの間にか手が止まっていたらしい。久保田が心配そうな顔つきで私に声をかけた。私は大丈夫と答えを返し、相変わらず味は分からないものの、無理やり口に押し込んだ。

食事を終え荷物も早々にまとめ、私たち三人は佐藤の家に向かった。玄関の鍵は掛かっており外から呼んだ。鍵を開ける音がして佐藤は私たちに顔を見せた。

どうしているのか気になっていた久保田と私は、そっと佐藤の顔を見た。すると驚いたことに、その顔には今まで見たことがないほどの静かな落ち着きがあった。佐藤の家で別れた時もこれほどの表情はしていなく、まだ心の整理がついていないようだった。だが、今では表情も晴れやかで昨日とは全く違った。家で一晩過ごすことで佐藤に心の変化があったのではないか。

「昨日の夜はどうでした？」

私は黙っていられなくなり佐藤に尋ねた。

「この村の夜空は都会とは比べようがないほどに美しかった。それを眺めながら、俺はこの家で過ごした頃や都会に出てからの生活を思い返していた」

佐藤はここまで一気に言った。まるで、誰かに打ち明けたくて仕方がなかったと言わんばかりに。私は黙って佐藤を見ていた。彼は言葉を続けた。

「俺の人生は辛いことばかりだった。こんな生き方は失敗だったとずっと思っていた。だがな……」

ここで久保田の方をじっと見て、

「久保田さんに俺の選択は間違っただけでなかったと言われたことを思い出すと、そんな道を辿ってきた俺自身を認めることができたような気がしたんだ」

と力強い声で言った。そして、今度は田中を佐藤は見た。

「確かに、俺が生まれた時代が不遇だったという思いもある。政府がもっと上手くやってくれていたならばという思いもある。もしも政府が俺に手を差し伸べてくれていたならば、俺はここで死を選ぶことはなかったのかもしれない。それを考えると俺はこの社会に対して腹の底から怒りを覚える」

佐藤は田中を睨んでいた。田中を通して政府を睨みつけていたに違いない。だが、ここでその睨む力が弱くなったように私には見え、

「でも、それ以上に自殺援助法が施行されホッとした自分があるんだ」

と呟くように言った。佐藤は続けた。

「だからな、俺は自殺執行人であるあんたを通じて政府に要求したい。この社会を変えてくれ。社会から振り落とされた者を救ってくれ。俺は自殺対象者の権利として要求する。これが、俺を救ってくれなかった政府へ言いたいことだ」

佐藤は田中の目をじっと見ていた。しばらく沈黙が続いた。佐藤は田中の言葉を待っていた。

「分かりました。自殺援助法第二条第二項・第三条第二項第三号に基づき、自殺対象者の権利は第一に優先され、それが遂行されるよう自殺執行人が支援する義務を負います。私が責任を持って佐藤様のご要望を政府にお伝えします」

私は心なしか田中の声が揺らいでいるような気がした。田中に視線を向けたが、相変わらず表情からは感情を読むことができなかった。

久保田は声をあげずに泣いていた。佐藤が

「久保田さんの言葉のおかげだ。何泣いているんですか。私のことを最後まで記憶に刻み付けてくださいよ。森岡さんもそんな神妙な顔をしないでくださいよ」

と声をかけた。佐藤は、この場にいる誰よりも冷静だった。田中が、そろそろ家の奥に入るよう言った。四人で行く。

「佐藤様、薬剤を投与する場所はいかが致しましょうか」

「そうだな。この卓袱台の隣に布団を持ってきて、そこで横になるとしよう」

そう言って佐藤は布団を持ってきた。田中は持参した黒靴から注射器を取り出した。

「では、横になっていただけますか」

佐藤が横になる。彼の死が近づいている。この注射針が彼に刺さり薬剤が体内に入ると、彼は間違いなく死ぬのだ。私の心臓は早鐘のように打っていた。久保田は自身の手を強く握り締めていた。佐藤は、田中と久保田と私を見つめた。

「久保田さん、森岡さん、短い間だったがありがとうな。田中さん、俺が言ったこと忘れるなよ」

そして、天井の方へ視線を向けると

「やっと両親への償いができるかもな」

と呟き、田中へ告げた。

「お願いだ。俺に薬を投与してくれ」

「分かりました」

田中は、佐藤の浅黒い肌へ針を刺した。私は瞬きをすることなく見ていた。

佐藤が少し微笑んだ。呼吸が次第に浅くなっていく。久保田の泣き声が部屋中に広がる。

「△月○日午前八時一分、ご臨終です」

田中が死亡を宣告した。

佐藤の死は驚くほどに呆気なかった。佐藤の死に顔は安らかで、まるで眠っているかのようにみえた。

佐藤は最早動き出すことはない。まだ感じられるであろう体温も徐々に奪われていくはずだ。

久保田や私も後少しで佐藤と同じように死ぬ。初めて、自分が死ぬということを実感した。心の中に冷たいものが急速に広がっていった。

頬が知らないうちに濡れ、泣いているのだと気が付いた。

死は誰が与えるものだろうか、私は疑問に思った。

佐藤の亡骸(なきがら)は彼が旅行で持参していた荷物とともに、この村に預けられた。どうやら、自殺ツーリズムでは亡骸と手荷物はその希望地に引き渡されるらしい。

田中と久保田と私は、次の希望地へ向かうためにバスに乗り込んだ。バスが発車し、村が小さくなっていく。佐藤が車内にいないのが、寂しく感じられた。

誰一人として口を開かず車内の空気は重かった。私も話す気になれず窓の外を見ていた。

その時、電話の着信音が鳴った。運転席の辺りから聞こえ、田中がバスを道の端に寄せて止めた。

「はい、田中です」

田中はしばらく電話に耳を傾けていたが、次第に渋い顔になった。

「かしこまりました。できる限りこちらで対処致します」

電話の相手は分からなかったが、どうやら田中にとって面倒なことを頼んできたらしい。田中の声は苛立ちも含んでいた。電話を切ると唐突に久保田と私の方に近づいてきて、

「ご家族が久保田様を探しているようです」

私は久保田の顔を見た。彼女は眉間に皺を寄せ憂鬱げな表情だった。

「なぜ私を？」

「どうやら、久保田様が残された遺言の内容を証人であった人から聞いてしまったようで、その内容に納得されていないようです。久保田様のご子息様とその奥様が市役所の自殺援助課まで怒鳴り込んで、行き先を問い詰めたみたいですよ。市役所では、ご本人以外の方にはお教えすることができませんと断ったようですが……」

「そうですか。息子と嫁が遺言の内容を知ってしまったのですね」

久保田は悲しげに言った。

「そういうことでございます。市役所によると、ご夫婦はかなり頭に血が上っており、久保田様を必ず見つけ出してやると喚(わめ)きたてながら出て行ったそうです」

久保田は大きなため息をついた。そして、

「息子たちが遺言の内容を知ってしまえば、騒ぎ出すことは分かっていました。だからこそ、田中さんにお願ひがあります。どうか息子夫婦のことは気にせず、この旅行を続けてください。お願いします」

と頭を下げた。田中は平坦な声で

「旅行はいかなる理由があろうとも続行します。政府の規定で決まっておりますので」

と久保田に言い、

「では、運転を再開しますね」

と運転席にまで戻って行った。バスが再び動き出す。

「森岡さん、ご迷惑をおかけしてごめんなさいね。まだ、佐藤さんが亡くなったばかりだと言うのに」

申し訳なさそうに久保田が言う。そんなことはない私が返すと、久保田はそのまま陰しい顔をして黙り込んでしまった。その横顔には長年の苦労によるものだろうか、幾筋もの皺が刻み込まれていた。

私はこの二日間、久保田の人柄の良さを強く感じていた。そのような人物が何故、自ら命を絶つ決意をしたのかという疑問が頭にまとわりついて離れない。

訊いてみたい思いに駆られたが、久保田自身が話そうとしないことを無理強いするのは躊躇(ためら)われた。だが、昨日の彼女の言葉を思い返すと、久保田について一層知りたいという思いに抗えなくなった。

「久保田さん」

久保田は物思いに沈んでいるのか、名前を呼ばれたことに気が付かなかったようだ。そのような彼女の邪魔をするのは気が引けたが、もう一度名前を呼んだ。すると久保田は驚いた表情で私を見て、どうしたんです？ と尋ねた。

「久保田さん、あなた自身についてもっと知りたいんです。佐藤さんのように話をしていただけませんか」

久保田はさも困ったというような表情を見せ、

「私の話なんて、聞いても何の面白みもありませんよ。それにこの話を聞いたら、森岡さんは私に落胆するかもしれない……」

「そんなこと、絶対にありません。ぜひ、聞かせてください」

と私は頭を下げた。久保田は私の様子に慌てたようで、頭を上げてくださいと言うと、月日が経つのは早いものねえと小さく呟き、記憶を噛み締めるように少しずつ話し始めた。

久保田と夫の晃が出会ったのは六十年前のこととなる。地元の企業に就職して数年が経ち、仕事を面白く感じるようになっていた頃だった。

当時、久保田が勤めていた会社は歴史は浅いものの勢いがあり、将来を有望視され、新商品の開発に取り組んでいた。久保田もその中のメンバーに選ばれ、仕事に人生を捧げていたと言っても過言ではないほど打ち込んでいた。女性メンバーは男性メンバーに比べて人数は少なかったが、男性に劣らず遅くまで会社に残っていた。休日も返上で働き、自分が自由に使える時間というのはほぼなかったが、やりがいを感じていた。

メンバーが開発した商品の売上は上々で、今度は外部企業と連携することになった。その担当者が晃だった。

晃は誰よりも真面目で仕事も早く信頼も厚かった。久保田はいつしか晃とともに仕事をする中で、彼に好意を抱くようになっていた。

久保田は晃を頻りに食事に誘い、彼にある時自分自身の思いを打ち明け、二人は付き合うこととなった。

彼と付き合い始めてから数年した時、二人で海に出かけた。久保田も晃も仕事で忙しかったので、遠出するのは久しぶりだった。

季節は夏も終わり秋に変わろうとしていた時で、泳ぐには海水が冷たすぎて、二人で話をしながら海を眺めていた。

話がふと途切れた。久保田が再び何か話そうとする前に、晃が結婚を申し込んだ。突然のことで久保田は言葉が浮かばず、驚いた顔をしていたに違いない。

晃が不安げな顔でもう一度尋ねると、久保田は微笑みながら頷いた。

結婚後すぐに男の子が生まれ、直人と名づけた。上司には一年間の育児休業を申請したが、あからさまに嫌な顔をされ、二ヶ月以上取得するならば辞めて欲しいと言われた。全てが上手くいっていた久保田はひどく衝撃を受けた。上司の言い分は、仕事に穴をあけるような人材は会社にとって必要ないということだった。

今まで仕事を第一に頑張ってきた久保田にとって、辞めることはできなかった。仕事は生きがいとも言えた。直人を受け入れてくれる保育園を必死に探して見つけた。

二ヶ月が経ち仕事に復帰した。休んでいた期間の分まで取り戻そうという意気込みでやる気に満ちていたが、久保田は開発チームのメンバーから外されてしまった。

それでも、久保田は熱心に仕事をこなしていった。

そのような時に、晃が交通事故に遭い亡くなった。夫を亡くした久保田は悲しみに暮れた。一日中泣いて過ごしていたが、そうはいかなかった。相手の過失だったので賠償金は入ってくるだろうが、直人はこれから大きくなっていく。お金が入り用になるのは目に見えていた。

以後、久保田は仕事をしながら直人を育てた。直人が病気になった時は会社を休まざるをえず、職場の上司や同僚から冷ややかな目で見られたこともあったが、働き続けた。

久保田は仕事で忙しかったために直人と一緒にいれる時間は短かったが、直人には金銭的な不自由を感じさせないようにしていた。

だが直人は高校生の頃から、素行の良くない仲間と付き合うようになってしまった。相手を殴って怪我をさせた時は治療費を工面し、大きな騒ぎにならないようにした。

大学に入ってから、ろくに学校に通わず博打(ばくち)をして、多額の借金を作り久保田が代わりに返済した。

就職してから一時期は鳴りを潜めていたが、突然会社を辞め起業すると宣言した。当時、直人には子どもを身ごもった妻もあり、久保田は貯金をはたいて援助した。

だが起業はしたものの軌道には乗らず、直人と嫁が金の無心に来た。久保田は自分の家財も売って自分の生活が貧しくなるにも関わらず援助し続けた。

久保田は七十で仕事を退職した。長年働いてきたが給与はほぼ上がらず、上司も久保田より若い男がいた。

退職後も二人は久保田の家を訪れ、少ない年金からお金を渡し続けた。

久保田はこれまで一度も直人たちから感謝されたことがなかった。二人は彼女が援助することを当然と考えていたのだ。幾度も資金援助を止めようと思ったが、息子たちのことを考えると止められなかった。

そのような時に、自殺援助法が施行された。それを知った時、久保田の中で何かが切れる音がした。

久保田は直人たちがそのお金を会社の資金ではなく贅沢(ぜいたく)品に使っていることを実は知っていた。ただ、それを信じたくなかったのだ。だが、直人たちのせいで彼女の生活は苦しく、今後の貯(たくわ)えはほぼなかった。

息子への愛情はあるが、この生活を続けることに何の希望を見出すことはできない。それならば、命を絶ってしまうのも良い選択のように思えた。

だが、久保田は直人たちに一矢報いたかった。久保田は家に残っていたお金になりそうなものを全て売った。晃が買ってくれた指輪やネックレスなど思い出の品も売った。大した金額ではなかったが、直人たちが目の色を変えるぐ

らいにはなった。

次に久保田は遺言の証人になってくれる人を探した。久保田は会社に長年勤めていたので仕事関係を抜きにすると交友関係が狭く、証人の紹介をしてもらうことも考えた。ただ、紹介料が発生してしまうのでそれはできる限り避けたかった。

何度も頭を下げることで証人になってくれる人を見つけ、遺言書を作成した。

ここまでで数ヶ月かかったが、これで準備は終わりである。久保田は息子夫婦の自宅へ向かった。

普段は息子夫婦が彼女の家に来ていたので、久保田が行くというのはとても珍しかった。

家に行くと、直人たちは久保田が来たのを訝(いぶか)るのと同時に、迷惑そうな顔をしていた。家の中に上がりたかったが、嫁が「急にいらっしゃるものですから、家の中が片付いていなくて」と言ったため、玄関で話をするしかなかった。久保田が下に目をやると、派手な色のヒールが何足も置いてあった。

直人から話を急かさず、久保田は言った。

「明日、役所の自殺援助課に行ってくるわ」

「何、お袋、死ぬの？」

直人は少し驚いた顔をしていた。久保田はそのような息子の様子を見て嬉しかった。久保田は自分が死ぬことを知って、彼が引き止めてくれることを心の中で期待していたのかもしれない。だが次の瞬間、

「なあ、死ななくてくれよ。俺たち、金がなくて生活に困ってるんだからさあ」

久保田は息子に裏切られたような気がした。

「もう決めたのよ」

強い口調で言い返した。すると直人はそう反対するのでもなく、

「そうなのか。じゃあ」

と久保田に興味を失ったようだった。嫁も直人と同じ反応で、二人は久保田に帰ってもらいたい素振りを見せた。そうした様子を見せ付けられた久保田は、怒りなのか悲しみなのかよく分からない感情にとらわれたが、直人たちの前で取り乱すことは自分が許せなかった。

急いで息子夫婦宅を出ると涙が自然と溢れてきた。夫を失ってから、仕事に追われながらも懸命に直人を育ててきた。確かに、忙しく直人と一緒にいる時間は限られてしまったが、いつも直人のためと思って働いていた。

自分がしてきたことは何だったのか。どこで道を間違えてしまったのか。悔やむべきところはたくさんあった。

だが、久保田は過去の自分を否定などしたくなかった。正しかったと信じたかった。

久保田はあの遺言書の選択も正しいと思った。遺産と呼べるような額ではないが、そのお金を息子夫婦ではなくNPO団体に寄付することにしたのだ。

翌日、久保田は自殺援助課に申請しに行った。窓口に行くと、自殺リズムというものも今日から申し込みができると言われた。それは何かと尋ねると詳しく説明を受けることができ、希望先の場所で死ぬのもいいかもしれないと久保田は思った。過去の思い出に浸(ひた)りながら死ぬのは自分にお似合いだった。

旅行当日の朝、荷物を持ち玄関で家の中を振り返る。ほとんどの物は売却したので、中はひっそりとしていた。上がり口に公証役場に行くように指示をした紙を置いておいた。ここならば、息子夫婦が来た時に気が付くはずである。久保田は、直人たちがこの家に残っている金目の物を全て売却しに家に来ると踏んでいた。

「でも、私が遺言書を作成する時に頼んだ証人の人たちが、直人たちに教えてしまったんですよ」

「それで、もしかすると怒った久保田さんの息子さんたちが追っかけてくるかもしれないと」

「本当に困った息子たちです」

久保田は首を横に振った。

「でも、久保田さんをご立派ですよ。ご主人が亡くなられてから一人で息子さんを育ててこられたんですよ」

私は久保田を賞賛したつもりだったが、彼女は複雑そうな顔をし、

「子どももまともに育てられなかった、駄目な親ですよ……。森岡さん、私の話を聞いて呆れてしまいましたよね」

と言った。そのようなことは決して思わないと私は繰り返したが、久保田に伝わったかは分からず終이었다。

久保田は夫を亡くしてから、女性一人で子どもを育てていくのは難しい時代だったのにも関わらず、ずっと一人で子どもを育ててきた。だが、彼女の思いは息子の直人には上手く伝わらず、ねじれた親子関係になってしまった。

人生とは思い通りにはいかないものだ与人知れず私はため息をついた。

その後は会話が途切れ、夕方になって今日の宿泊地に着いた。予定によると、久保田の希望地は明日の昼ごろにならないと着かない。

今日はホテルに泊まる。普通のホテルだったが、久保田や私はホテルに泊まるのも久しぶりで、田中が受付をする間、周囲を見回していた。私がホテルに泊まるのは、京子が元気だった頃以来である。

荷物を各自の部屋に置くと、ホテル内のレストランに田中と久保田と私で向かった。中に案内されると、私たち三人以外、人がいなかった。疑問に思っていると田中が、

「私たちが食事をする間は貸し切りになっております。自殺対象者の方がいらっしゃると伝えたところ、レストラン側も融通を利かせてくれました」

と事も無げに言った。

席に座ると、早速料理が運ばれてきた。初めは亡くなった佐藤や久保田の話のこともあり食欲が湧かなかったが、食べ始めると食事は美味しく、食べることに夢中になっていた。久保田も同じように黙々と食べていた。

食事を終えると私たち三人はコーヒーを頼んだ。注文してから運ばれてくるまで時間があつたので、私は気になっていたことを田中に尋ねた。

「佐藤さんは静かに息を引き取られましたが、他の自殺対象者の方はどういった最期を迎えられるんですか？」

佐藤さんは安らかに命を絶った。でも、誰もがそのような死を迎えられるとは思えなかった。久保田も私の田中への質問を聞いて興味深げな様子だった。

田中は少し考え込んだ後、

「自殺援助法が施行され、私は何人もの自殺対象者と関わってきました。もちろん、自殺ツーリズムに携わるのは今回が初めてですが、佐藤様のように安らかな死を迎えられた方も大勢いらっしゃいましたが、なかには、他人に暴力を振るったり、猶予期間中に逃亡された方もいらっしゃいましたので、即座に射殺した場合もございました」

と冷ややかな声で言った。私はその射殺という言葉聞いて身がすくんだ。そして恐る恐る銃はどこにあるのかと聞くと、

「ここにございます」

と喪服の中に手をつっ込むと黒光りする銃を取り出した。久保田が、

「もし、私と森岡さんもそのようなことをすれば……」

「即射殺ですね」

田中の話を聞いて、後少しで死ぬと分かりきっているのに背中から冷や汗が流れ出した。

「私も佐藤さんのように静かに息を引き取りたいです」

と久保田が心の底から願うかのように言った。

コーヒーが運ばれてきたので、ここでその会話は終わりとなった。

その後は各自の部屋に戻って行った。私もシャワーを浴びるとベッドに横になった。

〈四日目〉

荷物を整え食事をとると三人はホテルを出た。バスに乗り込むと、私は久保田に声をかけた。

「息子さんたちは今のところ、私たちの居場所を見つけていないようですね」

「ええ」

久保田は沈んだ声で答えた。

天気は晴れており、気持ちの良い朝だと私は感じた。車内では何事も起こらず、時間のみが過ぎて行った。

日が傾きかけた頃、やっと久保田の希望地に着いた。かつて久保田が晃からの結婚の申し込みを受けた場所である。バスから降りると、潮風が田中と久保田と私の間を吹きぬけて行った。夏の間は多くの人を訪れただろうが、今は数人の人影があるだけだった。久保田を見ると唇を噛み締め、体全体を震わせていた。そして、

「田中さん、森岡さん、すみませんが一人にさせてください。夕食の時には戻りますので」

と今にも泣き出しそうな声で言った。

田中と私は何も言わず立ち去り、今日の宿泊地である海沿いのホテルへ向かった。

夕食時になると、久保田は何事もなかったかのような表情で姿を見せた。この時は、当たり障りのない会話を久保田と私はした。

食事も終わり部屋に戻ろうとすると、久保田が私を引きとめた。そして、小さな声で私について来て欲しいと言った。

久保田はどこに連れて行くのかと疑問に思っていると、先程の海岸だった。

日はとっくに沈み闇夜だった。周囲に人はおらず、海の音だけが満ちていた。久保田はなかなか話そうとはせず、私は待っていた。

「私にとってここは大切な場所です。主人が私にプロポーズをしてくれたところですから。今振り返ってみると、あの頃が一番幸せだったと思います」

久保田が話し始めた。その声からは悲しみが感じられた。

「その後、すぐに主人は事故で亡くなり、私は死に物狂いで働きました。でも、息子との関係は上手くいかず、遺言書のことで怒りを買うことにまでなっていました」

ここで久保田は一息をついた。私はただ黙って聞いていた。

「ただね、息子が小学生ぐらいの時だったかしら。直人が私と主人の馴れ初めを聞いてきたの。私と晃がどうやって出会ったのか、そして、どこでプロポーズを受けたのかとかね」

久保田は直人に、ここは久保田にとって大切な場所なのだと伝えたと言う。

「だからね、私は直人があの会話のことを覚えていて、ここに来てくれるんじゃないかと思ってしまうの」

私の方を久保田は見た。

「直人のことも嫁のことも嫌になって、遺書を書いて旅行に参加したというのにね」

久保田は再び黙ってしまった。

久保田と私は何も話さず、夜の海を眺めていた。暗闇に包まれた海は人を惹きこむ力があるようだった。

その後、久保田と私は特に言葉を交わすこともなく部屋に戻って行った。

〈五日目〉

目が覚めると、早速朝食を食べに行った。田中は先に食べ始めていたが、久保田の姿は見えなかった。

「久保田さんは？」

と私が田中に問うと、

「まだいらしてません」

と答えた。

昨晚のこともあって久保田のことが私は心配だったが、部屋に行ってみて様子を見てくるほどでもないだろうと判断し、席に着いた。しばらくすると久保田がやってきて、私の隣に座った。挨拶をすると、久保田の顔は少しやつれているかのように見えたが、しっかりと挨拶を返してきた。

食事が終わったあと田中が、

「久保田様、希望地は海岸となっておりますが、そのまま横になられますか。それとも、敷物を下に置かれますか」

久保田は少し迷った後に、何もなしでいいわと答えた。

「久保田さん、私はどうすればいいですか」

と聞くと、ぜひ着いて来て欲しいとのことだった。

海岸に向かうと、人影が一つも見当たらなかった。

「久保田様が命を絶たれるまでの間、誰も入って来られないように手配致しました」

と田中が言った。久保田の表情が心なしか曇ったが、そうでうすかと答えたのみだった。

私は田中と久保田の後を着いて行った。周囲を見回して、彼女の息子らしき人はいないか探したが、どこにも見当たらなかった。

「ここでお願いします」

久保田が横になる場所を決めたようだ。

「この辺りで、私は晃からプロポーズを受けたんだわ」

と言った。

「では、横になっていただけますか」

彼女が少しだけ躊躇(ちゆうちよ)した。その時、

「いたぞ。お袋だ」

「本当ね。お義母さんだわ」

ここには場違いのような、騒がしい声が聞こえてきた。

「息子たちだわ……」

どこか安心したような表情で久保田が呟いた。

「お袋、どういうことだ。俺たちに金を渡さないっていうのは」

「お義母さん、どういうことですか」

直人と嫁が必死の形相で近づいてきた。だが砂浜であるため、二人はなかなか先へ行けない。

久保田はあらん限りの力で叫んだ。

「二人には私のお金なんか渡さないわ」

今まで見た中で一番嬉しそうな顔を久保田は浮かべていた。そして横になり、田中に投薬をお願いしますと言った。

田中も二人の出現に度肝を抜かれたようだったが、久保田の声で我に返った。

二人が近づいてくる。七十五歳の私に二人を止めることはできるのだろうかかと心配になりながら、私は二人の前に立ち足かかる。

「なに、このじーさん。通せよ」

「そうよ、邪魔よ」

私を押しつけて行こうとするが踏ん張った。

田中が針を久保田に刺したようだ。二人が私をどかし、彼女の方へ近づいていく。

久保田は口元をほころばせた。

「△月□日午前八時三十分、ご臨終です」

田中が死亡を宣告した。

佐藤と同じく久保田の亡骸も荷物とともに、この海がある町に預けられた。

久保田が亡くなった後、直人と嫁が田中に食ってかかっていたが、田中はどこ吹く風と聞き流していた。あの時の二人の顔は見ものだったと思う。

バスに乗り込むと車内には田中と私しかおらず、久保田も亡くなったのだと深く感じた。だが、久保田の死に様はとても明るく、彼女にふさわしいものだったと思う。

次こそ私の番だ。佐藤と久保田の死を見たものの命を絶つことへの迷いは生じず、むしろ思いが強まった。

「田中さん」

運転席にいる彼の名を呼んだ。はいと彼が返事をする。

「運転に集中されていて構いませんから、私の話を聞いてくれませんか」

大丈夫ですという返事を聞くと、何から話そうか迷いながらも、口を開いた。

私は、知人からの紹介がきっかけで京子と結婚した。互いが三十代半ばのことだった。結婚前から京子は子どもを産むことを望み、よく私に熱っぽく話した。

結婚後は郊外に家も購入し、子どもが生まれるのに備えた。

だが京子はなかなか妊娠の兆候を見せなかった。当時のことを振り返ると、あの頃は互いにピリピリしていたことを思い出す。このままでは子どもができないのではないかと、夫婦の間に問題があるのではないかと、互いが疑心暗鬼になっていた。

そのような時に京子は妊娠した。彼女は大いに喜んだし、私も自分が父親になると思うと妙に誇らしい気持ちになった。ただ妻が四十近くになり、無事子どもが産まれてきてくれるのか不安になることはあった。

「私、出生前診断受けてみるね」

彼女からこう言われた時、どのような検査をするのかも全く分からなかった。結婚当初から、彼女は妊娠後その検査をすると決めていたらしい。どのような検査をするのか聞いてみたところ、医療も進み現在では血液検査で判断ができるという。私は京子が決めたことならばそれでいいと思い、分かったと返事をした。

二週間ほど経ち、私が会社から帰宅した時、家の中の電気がついていなかった。誰もいないのかと思い、一応名前を呼びながら部屋に入ると、京子は机の上で突伏して泣いていた。どうしたんだと尋ねると、検査結果が返ってきたのだという。泣いている彼女の様子から嫌な予感しかなかったが結果を聞くと、陽性だったのだと、声を枯らしながら言った。彼女はより激しく泣きじゃくり始め、将来自分の子どもが障害を持って産まれる可能性が高いことを告げた。それを聞いた時、私の頭の中は真っ白になった。私は、ただ部屋の中に立ちすくんでいた。京子に声をかける余裕もなかった。

しばらくの間、京子の泣き声のみが部屋の中響いていた。泣き声が止んだ時、彼女が弱弱しい声で言った。

「検査なんか受けなければよかった。結果なんか知らなければよかったんだ。どうして受けようなんて思ってしまったんだろう」

私は京子に近づいて後ろから抱きしめるしかなかった。何を言えばいいかなんて私には分からなかった。

次の予約日には、会社を休んで京子と一緒に病院へ行った。待合室には、お腹を大きくした女性や赤ん坊を抱いた女性がいて、見るのも辛かった。私は、よく考えもせず京子に分かったと返事をしたことを悔やんでいた。彼女は床に視線をやり一度も顔を上げようとしなかった。

診察室に呼ばれると、私は詳しく検査の結果や障害を持つ子どもに関する話を聞いた。そして最後に医師は、

「中絶という選択肢もあります」

と私たちに告げた。その言葉が私の頭に張り付いた。

家に帰ると私たちは机に向かい合った。部屋に沈黙が降り、互いが口を開こうとしなかった。私は、医師の「中絶を望まれる場合、早めのご決断をお勧めします」という言葉を思い出していた。ただ、私は京子の意志を尊重したかった。

「ねえ……」

京子がこれまでに聞いたことがないくらい消え入りそうな声で切り出した。私はあとの言葉を待つ。

「中絶しようか」

彼女が言い、私の様子を窺っていた。

私はただ黙ってその選択を受け入れた。

その後、私たちは子どもを墮ろし、もとの生活に表面上は戻って行った。私は会社に勤め、彼女はパートに出たり習い事をしたりと平穏な日々が続いた。

だが、中絶を選択した日から私と京子の間で子どもの話をすることはなくなった。テレビで少しでも子どもに関するニュースが流れると、どちらからともなくチャンネルも変え、子どもが多くいるような場所に出かけることも避けるようになった。妊娠前までは、テレビでそのような話題が出ると、将来の自分たちの子どもについて話したり、子どもが前を通ると目を細めて見ていたりしたものだったが。

子どもを殺した罪悪感が私たち夫婦にはあったのだ。ただ、そのことを口には出さなかっただけなのだ。

そして時は過ぎ、私は会社を退職した。仕事から解放されしばらくは家で自由気ままに過ごしていた。ただ、その生活にも飽き始め、旅行に行かないかと料理をしている京子の後姿に言った。京子は手を休め、そうねえと考え込み、

「私、遊園地に行きたいわ」

と唐突に言った。ずっと子どもがいる場所を避けてきた京子が遊園地に行きたいと言うとは意外だった。それに、年齢的にもどうなのかとも思った。

私が口に出してそれを言うと、

「私ね、あなたとあなたの子ともと一緒に遊園地に行くのが結婚前からの夢だったの。あなたが馬鹿にするだろうと思って、結婚後も言わなかったけど。それに、子どもも産まなかったし……」

と最後は語尾も弱弱しくなったが言った。

「だからね、夢は完全には叶わないけれど、体が自由に動くうちにあなたと一緒にいきたいなと思って」

私は笑って、京子はまだまだ死なないだろと言いながらも、一緒に遊園地に行くことを約束した。

私は計画を立て始めた。どこの遊園地に行こうか、どこに泊まろうか、考えることはたくさんあった。

だが、それは無駄になってしまった。京子のがんになっていたことが分かったからである。しかも、すい臓がんだった。胃もたれが続くと京子は言って近くの病院に行ったのがきっかけで、がんの進行は進んでおり余命は一年もないかもしれないと言われた。

診断結果が出ると治療がすぐ開始された。遊園地に行くことはすっかり忘れ去られてしまった。京子は日に日にやせ衰え、見ている方も心の痛みを伴った。そして、医師の宣告どおり一年も経たないうちに、京子は静かに息を引き取った。

「……で、私は自殺ツーリズムの報道を見た日、京子との約束を思い出したんです。彼女がいない生活というのは、無味乾燥なもので正直嫌で堪(たま)りませんでした。だから、遊園地を希望地にして、そこで命を絶つことに決めたのです」

と、そこで私の話は終わった。

田中は、そうですかとだけ言い、運転に注意を戻した。話し始める前に、運転に集中していて構わないとは言ったものの、一言で私の話を片付けられるのは悔しかった。そこで、私はある提案をした。

「明日、一緒に遊園地のアトラクションに乗りましょう。私の心臓が止まらない範囲で」

田中は無表情を保とうとしたが、一瞬嫌そうな顔をしたのを私は見逃さなかった。

「私の権利ではありませんか。以前、佐藤さんが亡くなる直前にも言っていましたよね」

私は田中に追い討ちをかけた。田中は渋々ながらもその要求を受け入れた。

外が暗くなった頃、田中と私は遊園地の園内にあるホテルに到着した。明日は開園と同時に園内に入るつもりだったので、夕食もそそくさと済ませると、互いの部屋に戻り眠った。

〈六日目〉

食事を早くすませると、開園前の列に田中と二人で並んだ。私は胸ポケットに持参した京子の写真を入れていた。田中が言うには、「あなたは自殺対象者であるのだから、列に並ばなくても一番に園内に入ることはできるし、アトラクションも同様に並ばずに好きなだけ乗ることができる」ということだった。だが、私はその申し出を断った。京子が望んだのは、一般人として遊園地を楽しむことだった。そのせいか、田中の顔は感情が読み取れないのを通りこして、無愛想になっていた。

入園すると周囲の人が四方八方に走り始めた。この光景が不思議で見ていると、

「人気のあるアトラクションに早く乗るためなんです」

と田中が丁寧にも教えてくれた。園内の中央には観覧車があり、その存在が際立っていた。

幸い年がいった者でも乗れそうな乗り物は、少し並ぶだけで乗ることができた。今日の田中は私がお願いして喪服ではなく普通の服を着ているが、年が離れた男二人が遊園地にいるのは珍しいためか周囲から視線を浴びた。

午前の時間は瞬く間に過ぎていきお昼になった。私がベンチに座って待っていると、田中が二人分のラーメンとお茶を買ってきた。遊園地でラーメンなんてものが売っているのかと見ていると、食べないのですかと訝(いぶか)しげな顔をされた。田中から受け取り、麺を啜(すす)ると体が温かくなった。田中に、ここの遊園地には行ったことがあるのかと聞くと、子どもの頃に何度かという答えが返ってきた。今の田中を見ていると、彼が子どもの頃は一体どういう感じだったのか気になるので、さらにそれも聞くと田中は、

「どこにでもいる普通の子どもでしたよ」

と素っ気なく答え、食べ終わったならば次のアトラクションへ行きましよう、私を急(せ)かした。

午後の時間も様々な乗り物に乗り、楽しく時間は過ぎていった。だが、一日中年甲斐もなく遊園地で遊んだせいか、体は重く疲れきってしまったので、最後に観覧車に乗って終わることを田中に提案した。分かりましたと彼は答え、列と一緒に並んだ。

順番が来ると向かい合わせで乗り込んだ。その頃になると日が落ちていた。観覧車が徐々に上がっていくと、園外の家々には明かりが灯り、園内もイルミネーションが輝いていた。私は束の間見とれてしまった。写真を胸ポケットから出し、京子にもこの景色を見せる。

「今日はありがとうございました、田中さん」

私は礼を言った。彼のおかげで今日一日を満喫することができた。京子との夢も叶えることができた。

「私も楽しかったです、森岡様」

と、田中から意外な返事が返ってきた。田中も楽しんでくれたのならばよかったと思った。

ここで私は、園内に入場してから考えていたことを切り出した。

「明日はこの観覧車のゴンドラでと考えているのですが」

田中は少し考え込んだが、

「開園前ならば人もいないので大丈夫でしょう。遊園地側に聞いてみます」

と答えた。

気付けば、私たちが乗っていたゴンドラは地上に近づいていた。係員が外から扉を開けてくれ、急いで田中と私は降りた。

園内から出るまでもう一度振り返る。観覧車も虹色にライトアップされていた。その光景を私は記憶に刻み付けた。

ホテルに戻ると軽く食事をとり、眠った。瞼(まぶた)には虹色の輝きがちらついていた。

〈七日目〉

電話の音がうるさく鳴っていた。まだ眠くて仕方がなかった私は、音が止まるまでやり過ごそうとしていた。だが、その電話はしつこく鳴り続け、こちらが根負けした。

「もしもし」

眠りを妨げられた私は声をやっとなり出した。

「森岡様ですか？ お時間がだいぶ過ぎています。早く下に降りて来てください」

田中の感情をそぎ落としたかのような声が受話器から聞こえた。時計を見ると、寝過ごしたことが分かった。昨日の疲れが溜まっていたのかもしれないが、自分の命を絶つ日にやってしまうとは思わなかった。そのような自分が可笑(おか)しくて、少し笑ってしまった。気分はとともよかった。

京子の写真を持って下に降り、田中に謝ると手早く食事をとる。時間はなかったが最期の食事也十分堪能できた。

「遊園地の方からも許可を頂きました」

と田中が食事中に告げた。私は安堵して、ありがとうございますと頭を下げた。

食事を終わると田中と私は遊園地に行った。自分の死が迫っているのに不思議な程に、穏やかな気持ちだった。太陽の光も優しく私たちに降り注ぎ、いつもより暖かく感じられた。中は静まり返っていた。

「園内には誰もいないのですか？」

と田中に問うと、観覧車を動かす係員が一人だけいると答えた。他の係員は私のことを慮(おもんばか)って来ていないらしい。

観覧車の前に向かうと、赤い制服を着た男性が待っていた。田中と私をご迷惑をおかけしましてと謝ると、自殺対象の方が第一優先ですからと、さも当然かのように言った。

ご準備はできましたかと田中に聞かれ、写真を強く握り締め、はいと答えた。

ゴンドラに田中と私は二人で乗り込んだ。ゆらゆらと上がっていく。

「田中さんは死んだらどうなると思いますか」

と私は聞いた。田中は間を空けずに、

「火葬場で体を焼かれ骨となります」

と言った。私はその答えを聞き少し微笑みながら、

「田中さんはそのように言うだろうと思っていました」

と答えた。そして言葉を続け、

「ですが私はこう思うのです。亡くなった京子と生まれるはずであった子どもが、この空で待っていてくれると。田中さんは、子どもじみた考えだと鼻で笑うかもしれませんが」

田中は何も言わなかった。

「結局は誰にも分からない。それならば、自分が思うような死後を描いていいのだと私は思います」

と誰に言うともなく私は言った。田中と私が乗ったゴンドラは今や一番高く上ろうとしていた。景色が遠くまで広がっていた。京子の写真をもう一度見て、

「田中さん、投薬をお願いします」

と告げた。

森岡の七日間の手記は各メディアが取り上げ、大きな反響を呼んだ。社会全体で森岡の手記を読むことが流行りとなり多くの者が購入した。

だが月日が経つと次の話題に関心に移り、書店では埃をかぶった彼の手記がうず高く積まれるようになっていた。

○第三部

中村由佳は強い苛立ちを覚えていた。スーパーのレジには長い列が三つに分かれてできていた。舌打ちをしたい気分だったが何とかこらえ、列に加わった。ただ、由佳が並んでいる列はなかなか前に進まなかった。不思議に思い列から少し出て前方を窺うと、髪が真っ白になった老齢の女性もたもた小銭を出しているのが原因だった。店員も人がいいのか、ニコニコしながら女性の手元を見つめていた。由佳は心の中でその女性のことを毒づき、店内にかかっている時計を見た。

午前十一時半。普段なら家にとくに着き昼ごはんの仕度を始めている頃である。主婦が一人で食事をするなら時間は問題にならないが、家には義母の恵がいる。恵は食事の時間が少しでも遅くなると、家中に轟(とどろ)きわたる声で悪態をつく。そもそも、由佳がスーパーに出かけようとする直前に彼女がトイレに行きたいと言い連れて行ったのが、遅くなった原因である。本人はそのことを忘れ昼食が遅れたことを攻め続けるのだろう。家に帰ってからのことを考えると、由佳の胃はきりきり痛んだ。

やっとレジの会計を済ませ、急いで家に戻る。玄関の鍵を開けて入ると家の中は静かで、由佳は小さく息を吐いた。日中の恵は、排泄と食事の時間を除いては、眠っていることが多い。恐らく今も眠っているのだろう。

スーパーで買ってきた品物を片付け昼食の仕度をしていると、一階の奥の部屋から、恵の身の毛がよだつような喚き声が聞こえてきた。きりりきりり。胃の痛みが増したのが分かった。それでも、由佳はその声を無視し手を止めなかった。

飲み込む力が弱い恵のために軟らかく煮込んだ食事を作ると、電動ベッドに横になったまま今か今かと由佳を待ち構えているであろう彼女の部屋に向かった。障子を開けると、大きな声をあげつつ由佳を睨んでいた。

「遅い、遅い、遅い。一体、何してるのよ」

由佳は小さな声ですみませんと謝ると、スプーンで恵の口に食事を運ぼうとする。だが恵は食べることを嫌がり、由佳に向かって暴言を吐き続けた。

「出来損ないのあなたをせっかく嫁としてもらってあげたのに、やっぱり役立たずだわ」

「あなたの親を見ていると、育ちの悪さが分かるわ」

由佳はいつもこの義母の前では心を閉ざし、聞き流そうと努めていたが、両親のことを言われると辛くて辛くて仕方がなかった。それでも平静を保ち、早く恵の部屋から離れようと口に無理やりスプーンを押し込もうとしたが、上手くいかない。その瞬間、部屋の中に破裂音のようなものが響いた。由佳は驚いて自分の右手を見ていた。スプーンは床に落ちていた。恵はほんの数秒、由佳に対して恐怖の視線を向けていたが、耳をつんざくような声で絶叫した。

「痛いよお、痛いよお。嫁が叩いたわあ」

恐らく近隣の家々にまで恵の叫び声は漏れてしまっているだろう。由佳はそのようなことを頭の片隅で思いながらも、彼女をなだめる気にはなれなかった。

由佳は自分が義母に手を上げてしまったことを信じられなかった。義母が由佳に暴言を吐くのは日常と化しており、常に耐えてきた。そもそも、由佳が嫁いだ時から義母との関係は冷え切っていた。

由佳は呆然と恵を見ていたが、今なお喚(わめ)き続ける彼女に対して次第にどうしようもない不快感が湧き上がり、部屋を飛び出した。これではいけない、冷静にならなくてはと自分に言い聞かせるが心は乱れていた。恵の声は部屋の外からも響き、由佳を支配し続けた。

義母の声が止む気配はなく、なだめに戻ろうかとも思ったが、再び手を上げてしまわないか不安だった。由佳はどうすることもできず、恵が落ち着くまで外に出ていることにした。

恵が寝たきりになった五年前からずっと世話に追われ、由佳には自分の時間というものがある。そのため、この突然空いてしまった時間に戸惑いを感じた。仕方がないので近くの喫茶店で時間をつぶそうかと歩き始めると、後ろから名前を呼ばれた。振り返ると、化粧を綺麗に施した由佳と年代別の女性が立っていた。向かいの山田である。

「家の中から大きな声がしているようだけど……」

と由佳の家の方を一瞥(いちべつ)してから、そう言った。由佳は山田に、恵に手を上げたことが知られていないか恐れながら、

「ちょっとお義母さんが……」

と言葉を濁した。

「中村さんのところ、お義母さんのお世話大変よねえ」

と同情したような声で山田が返す。どうやら、由佳が手を上げたことは気付いていないらしい。由佳は適度に山田に相槌(あいづち)を打ちつつ話を合わせた。彼女の話は長く由佳の意識は逸れていった。

「ちょっと、中村さん聞いている？」

山田が少々苛立った声を出した。由佳は我に返り、慌てながらも急いで聞いているような素振りを見せた。

「……それでね、地区は違うけれども、伊藤さんというお宅知らない？」

由佳は知らないと答えると、

「私も、特に親しいというほどでもないんだけど、この前久しぶりに奥さんに会ったのよ」

その奥さんというのも、どうやら由佳と同年代らしい。由佳は話の方向性が見えず戸惑いながらも、山田の話に耳を傾け続けた。

「するとね、伊藤さんたら澆刺(はつらつ)とした感じでね、雰囲気もとても明るかったのよ。それで何かあったんですかって私が聞くと……」

ここで山田は話を区切ると用心深そうに周囲を見回し、由佳の方に顔を近づけ、

「伊藤さんの義理のお父さんが亡くなったんですって。でも、ただ亡くなったわけじゃない。ご家族が申請したらしいのよ、自殺援助課に」

由佳は頭を殴られたような衝撃を受け、山田がまだ何か言おうとしたのを遮り、口早に尋ねた。

「そんなことできるんですか？ だって、本人しか申請できないんじゃない……」

「やあねえ、中村さん何も知らないのね。最近、話題になってるのよ。条件つきで本人以外の家族でも申請できるってね。そんなことが条文に紛れ込んでたそうよ。政府は法律を制定した時にそれに触れず、国民も自分で死を選べることばかりに目が行き、気付くことができなかった」

山田は由佳のものの知らなさに呆れたようだったが、由佳はそれには構わず訊き続けた。

「じゃあ、家族が申請できる条件とは何ですか？」

「本人の意思能力がないと見なされる場合よ。例えば、認知症の方が当てはまるわ。伊藤さんのお義父さんもそうだったらしいわね」

由佳は義母のことを不意に思い出した。恵もまた認知症を患っている。

「そんな……、家族が申請するなんて」

由佳は言葉を失ってしまった。

「伊藤さんから聞いた話だと、お義父さんのお世話は相当大変だったみたいね。家族の生活も減茶苦茶になって、身体的にも精神的にも限界がきていたそうよ。施設に入れようかって話も出たけれどどこも満床状態で、最低数年は待機していなければならなかったらしいわ」

山田はさも気の毒そうな顔をした。

「だからかしらね、伊藤さんとこの奥さんが晴れ晴れとした表情をしていたのは。終わりの見えない介護から抜け出すことができたから」

ここまで話すと時計を見て、長いこと話し込んでしまったことに気が付いたようで、山田は家に戻って行った。

由佳は一人取り残されてしまった。伊藤さんの奥さんの話が頭に引っかかって仕方がない。義母も自殺援助課に申請できるのだろうかと思つたが、慌ててその考えを打ち消した。

山田とはだいが話していたようで一時間程経っていた。恵の声も止み、周囲には静けさが漂っていた。由佳は様子を見に行こうと中に入った。

部屋に行くと、恵は穏やかな寝息を立て眠っていた。ベッドには食べかすが散らばっていた。体が不自由なために由佳がいつも介助していたが、自力で恵は食べようとしたらしい。その状態を見てみると、由佳は義母に申し訳なく思えてきた。たとえ恵との関係が上手くいっていないにせよ、彼女は由佳がいないと何もできないのである。三年前に義父が亡くなってからは、由佳しか介護できる者がいないので尚更だ。

すみませんと呟くと、由佳は恵を起こさないように気を配りつつ部屋の中を片付け静かに出て行った。

夜遅くになって夫の雄大が帰ってきた。大学生になる息子から今日は帰らないという連絡がきていたために、由佳は恵に夕食を食べさせた後、一人で食事を済ませていた。

赤い顔で帰って来た雄大は酒臭かった。毎晩、仕事終わりに飲んでくるのである。おかえりなさいと声をかけると、ああと気の悪い返事をし、由佳が用意した軽食に手をつけた。特に会話というものも存在せず食べ終わると、彼は風呂に入りそのまま寝てしまった。

会社が休みの時も、彼はどこかに出かけてしまい家におらず、夫婦としての仲は完全に終わっていた。由佳はその状況に慣れてしまい、今では諦めきっていた。

由佳も夫のいる寝室に向かわず、居間に布団を敷いて横になる。すると、三十分も経たないうちに奥の部屋から声が聞こえてきた。夫の雄大の名前を呼んでいる。だが、すでに彼は寝てしまい起きてくることはない。最初は、か細

く弱弱しい声であったが徐々に荒くなってきていた。由佳は意識が朦朧(もうろう)としていたが起き出し、恵のところへ行った。

中へ入り「お義母さん、大丈夫ですか」と声をかけると、間髪入れず、「違う、あなたじゃない」と吼(ほ)えるような返事がした。

「雄大はどこ？ そうだ、あなたが私のとこに来ないようにさせてるんでしょ」

「違います。そのようなことはしていません。雄大さんは疲れてお休みになっているんです」

胃が再び痛み出したが恵を落ち着かせようと必死になだめた。その甲斐もあってか、しばらくすると恵は落ち着き、由佳は布団に戻った。胃は痛み続けていたが気にせず目を瞑った。布団に横になっていると体の強張りも和らぎ、次第に眠りに引き込まれていった。

「誰かー」

再び恵が呼んでいた。時計を見るとまだ夜中である。由佳は眠気で鉛のように重たい体を何とか起こし部屋に向かうと、今度はトイレに行きたいということだった。ふらつく恵の体を支え、トイレが済むと布団に戻った。

朝を迎えるまで恵に起こされることが頻繁に続いた。

これは義父が亡くなってから一層ひどくなり、由佳は居間で眠ることを余儀なくされた。睡眠を毎晩妨げられるので極度に疲弊していた。

大きなため息が自然と漏れ出ていた。由佳も五年前までは働いていた。その頃も雄大との会話は少なくなっていたが、今よりは夫のことを信じていた。だが、恵が寝たきりになると、誰かが付きっきりで面倒を看なくてはならなくなった。義父もその頃は健在ではあったが、彼一人で全てを行うのは無理があり、夫や夫の親族から仕事を辞めて義母の介護をするべきだと言われた。由佳は猛反対したが、誰も聞き入れてくれなかった。施設に入れることや介護ロボットの購入を考え必死に調べたが、価格の低い施設は入所条件が厳しく、介護ロボットはあまりにも高く手が出なかった。結果、泣く泣く由佳は仕事を辞め恵の世話をしてきた。

でも、このような生活がいつまで続くの？

由佳は深い絶望感に襲われた。昨日言っていた山田の言葉を心の中で転がしてみる。——終わりの見えない介護——義母である恵の介護はいつまで続くのか。それは突然終わりを告げるかもしれないし、果てしもなく長いものになるかもしれない。恵の世話ができるのは由佳しかいないが、彼女には日々の一瞬一瞬が終わりなき時間に思えた。

実際に申請に行くわけでもない。由佳は自分自身に言い聞かせながら、自殺援助法について調べてみることにした。

数週間の間、時間の合間を縫って由佳は情報を集めた。あらゆるメディアが自殺援助法に関して取り上げており、驚くほど簡単に入手できた。由佳はあまりの容易さに、自身がどれほど情報に疎(うと)かったかを痛感した。これでは山田が呆れるのも無理はない。

収集結果として分かったのは、やはり恵は本人の意思能力がないと見なされるため家族が申請でき、その家族というのも、極端に言えば由佳一人でもいいということだ。この申請者の条件を知った時は、由佳も目を見張った。事実であるのか何度も疑ったが嘘ではなかった。そして、家族が申請者という事例も予想以上に多く存在していた。

由佳はこの無知ゆえの発見で気持ちが高ぶり誰かに話したくて堪(たま)らなくなったが、五年余りの介護生活で友人とは距離ができてしまっていた。そのため、普段なら特に会話も交わさない雄大に話をした。

由佳は話してから彼の表情を見て直ちに後悔した。仕事帰りに酒を引っかけしまりのないものから怒気を孕(はら)んだものへ一変したからだ。そして、今までに聞いたことがないほどの威圧的な声が由佳に襲い掛かった。

「由佳、お前まさか俺のお袋を殺そうっていうわけではないよな」

雄大が何を言っているのか理解できなかった。由佳は彼が言うように人を殺めるつもりは微塵もなかった。ただ、「殺す」という言葉に彼女自身もひどく混乱した。

「違うよ、そんなつもりで言ったんじゃないの」

雄大に必死に違うことを説明しようとするが、言葉だけが上滑りし、部屋の中で虚しく響いた。

「じゃあ何故、そんなこと調べているんだ。俺が何も知らないとは思うなよ、お前が最近こそそそとやっていたのは分かっているんだ」

これほど激昂(げきこう)した雄大をかつて見たことがなく、由佳はどうすればいいのか途方に暮れた。すると、騒ぎを聞きつけたのか二階にいた息子が下に降りてきた。

「こんな遅くに、一体何を言い争っているんだよ」

「お前の母親が俺のお袋を殺そうとしてるんだよ」

違うわ、そんなことするつもりないと由佳は泣き崩れた。男二人の冷徹な視線が彼女に突き刺さった。長い間、由佳のすすり泣きのみが続いていた。

「分かった。今回はお前を信じよう」

雄大がそう告げ、そのまま二階へ上がって行った。息子もしばらく由佳の顔を見下ろしていたが、やがて彼に続いた。

由佳は体を動かすのも億劫(おつくう)でそのままだった。まるで自分が空っぽになったかのように感じた。

夫や息子に投げつけられたあの視線を思い返す。自分を信じていない目。これまでの家族としての繋がりが何の意味も持たなかったことを突きつけられた。申請するつもりで話をしたわけでは断じてなかったのに、義母を「殺す」のだと疑われてしまった。

由佳はこの手が彼女の命を生かすことも殺すこともできるという事実を実感し、あまりの恐ろしさに震えおののいた。

気が付くと、恵が奥の部屋から呼んでいた。ふらふらと立ち上がると彼女のもとへ向かった。部屋に入ると、今更のこのように先程の騒ぎが恵に聞こえていないか気になったが、平静を装ってどうされました? と尋ねた。

「トイレに連れて行って頂戴」

と恵はいつもと変わらない様子で由佳に言った。恵のことだから騒ぎが耳に入れば第一に問いただすだろう。気付いていない彼女の様子で由佳は安堵した。

その後も夜が明けるまでしきりに呼び出しを受けたが、今日だけは気にならなかった。

夫と息子がそれぞれ会社と大学に向かうと由佳は恵と二人きりになった。彼らは何一つ由佳とは話さず足早に出て行った。

由佳が食器の片付けや掃除をしていると、奥の部屋から名前を呼ばれた。普段なら由佳を呼ぶ時は「誰かー」としか言わないのに、今回だけは「由佳さん」と呼んだ。今までそのようなことは一度たりともなく、何かは分からないが嫌な予感がした。神経が磨耗するような胃の痛みだけではなく吐き気もした。それでも、恵は呼び続けるので無視するわけにもいかない。先延ばしにするのを望むかのように、由佳はとろとろと足取り重く部屋に向かった。入りますねと声をかけ足を踏み入ると、憎悪で顔が醜く歪んだ恵の顔がそこにはあった。

「ずっと私のことを厄介者扱いしているとは知っていたけど、殺そうとしていることまでは気付かなかった」

低い声が静かに由佳へ切り込んだ。気に入らないことがあればすぐに大声を出す義母が落ち着きを保って話しているので、それが余計に凄みを与えた。

「いいえ、違うんです」

と由佳は即座に否定し、夫や息子にも説明し誤解を解いたことを話した。恵はやはりあの騒ぎを聞いていたのだ。それを夜の間に由佳に言わなかったのは、万一でも彼らにこの会話を聞かせたくなかったからだろう。彼女が日頃から厳しくあたるのは由佳だけだったからである。

なおも恵は疑い問い詰め続けたが、由佳は首を横に振り続けた。確かに自殺援助法について調べはしたが、由佳は心の中で、自分がいないと何一つできない恵を哀れんでもいた。その思いは本物だった。

「……だから、あなたが雄大と結婚するのは反対だったのよ。本性はこんなにひどい悪女なのだから。ああ、何も知らない息子と孫が可哀想で堪(たま)らないわ」

恵はいかにも不憫(ふびん)で仕方がないというように少し顔を傾けた。

知らぬ間に、由佳の手は小刻みに震えていた。血がにじむぐらいまで唇を噛み締め彼女の中の獯猛(どうもう)な怒りを抑えた。気を抜けば、また恵に手を上げてしまいそうだった。今度は一発ではすまない。自分の手が赤く腫れ上がるまで打ち据えるだろう。

あなたが私の生活を滅茶苦茶に壊したんだ。夫と息子にあのような仕打ちを受けるのは、結局はあなたが寝たきりになったからなのだから。

今まで義母に向けるべきではないと無意識に押さえ込んでいた感情の籠(たが)が外れたかのように、心の中で渦巻いた。

それでも、由佳はその荒々しい感情を押し込み、違いますと言い続けた。

やがて、恵は由佳を問い詰めることに疲れたのか諦めてしまったのかは分からないが、由佳がこの部屋から出て行くように指示をした。

失礼しますと感情を消した平坦な声で言い出て行くと、そのまま鞆(たもと)を持ち足早に家を出た。胃の痛みや吐き気も消えていた。最早(もはや)迷いはなかった。

翌日、夫と息子を見送ったしばらく後に、喪服に身を包んだ一人の男性が中村家を訪れた。

「私は自殺執行人の田中と申します。申請者の由佳様でいらっしゃいますね」

と抑揚のない声で彼は言った。

「では、お伺いの通りお義母様である恵様に投薬致しますね」

由佳はお願いしますと頭を下げ、恵がいる部屋に案内した。「今は眠っているはずなので……」

と田中に言い、入るように促した。

由佳は内心、緊張で胸が締め付けられていた。もしも恵が起きていたらどうしようと不安で一杯だったが、それは杞憂のようで彼女は安らかに寝息を立てていた。由佳は小さく息を吐き、田中の一挙一動でも見落とさないよう集中していた。

田中は持参した黒靴から音もなく注射器を取り出し、素早く腕に針を刺そうとした。

その瞬間、恵の臉(まぶた)が痙攣(けいれん)したかのように動き、彼女が目を覚ました。

恵は迫ってくる注射針を見て状況を直ちに理解したようだった。

ぎゃあああ、と喉が潰れたような、一度聞いたら二度と忘れることのできない声を彼女はあげた。これが真に人が狂気に侵された時にあげる声なのだと、由佳は理解した。恵は田中の注射器を持った手を振り払うと、怒涛のごとく部屋を飛び出した。由佳の体の支えがなければ動くこともままならない恵がそのような動きをとったので、由佳だけではなく事前にその話を聞いていた田中まで、瞬時に恵を制止することができなかった。

「急いで追いかけてしょう」

と田中が切羽詰った声をあげ由佳も追った。玄関のドアは開いており、恵は外に出たようだった。

きゃあああ、と甲高い叫び声が外から聞こえた。田中と由佳は、恵が向かいの山田にしがみついているのを見た。恵は、「死にたくない、死にたくない」と絶叫しながら、山田の体を勢いよく揺さぶっていた。恵のどこにそのような力が残っていたのか分からないが、山田は突然の出来事で気を失いかけていた。

不意に街を引き裂くような鋭い音が鳴った。恵がゆっくりと力を失ったかのように倒れた。後ろを振り向くと、田中の銃口からは一筋の煙が揺れていた。

終わりの見えない旅が幕を閉じた。

○第四部

安藤肇は自殺援助法が施行されてから丁度一年が経ったこの日に、緊急記者会見を開いた。彼が何と述べるかが大いに注目を集め、国内だけではなく海外からの記者も押し寄せていた。首相官邸室の前には反対の団旗を掲げる者のみならず、法案通過前には見られなかった熱狂的な支持者もいた。その中には、七十歳以上と年齢制限を設けるのではなく、全年齢で認められるべきだと主張する者もいた。

安藤が舞台上上がると無数のフラッシュが瞬いた。その光に対して挑むように彼は記者を見回すと話し始めた。

「この一年を振り返ると、私は自殺援助法は成功だったと思います。自殺ツーリズムも途中から導入しその財源について批判的な意見も出されましたが、結果的にはそれ以上の緊縮を進めることができました」

ここで安藤は指示を出し説明版を持ってこさせた。それには、法律施行前後の高齢化率が載っていた。

「私たちは、およそ一ヶ月前から日本国民の人口調査を行ってきました。その結果、法律施行前の高齢化率は四十%を越えていましたが、現在では三十五%を切っています。それに伴い、年金等の財源支出も大幅に抑えられます。今後、申請者は増加する見込みですので、一定の効果が認められます」

一人の記者が挙手をして質問することを求めた。安藤が許可をすると立ち上がり、

「安藤首相は自殺援助法の利点ばかりを述べられていますが、実際には問題も多数噴出したように思われます。その点についてはどう思われますか？」

彼はそのような質問でも怯まなかった。

「はい。確かにそのような報告も受けております。今回の法律制定により想定していなかった事態も起こりました。ですが、国民の皆さんの死ぬ権利を保障できたことは評価しています。この法律が存続するよう修正を重ねていく予定です」

翌日、各局のテレビ番組がこの緊急記者会見を冒頭に紹介し、最後は「今日も穏やかな日になりそうですね」とにこやかに締めた。